

日本とベトナムの新宗教の類似点および相違点について

ファム・ホン・タイ

ベトナムでは、1990年代以降、以前にはあまり見られなかった「変わった宗教」や「邪教」と呼ばれる新宗教が盛んに現れた。そのような宗教団体の規模は様々であり、全国各地に存在するが、最も多い地域は、伝統的な宗教や信仰の要素を混ぜ合わせたり、海外から入ってきたりした信条・教理がある北部である。ここ10年の間に、その「変わった宗教」「邪教」はベトナムの研究者の注目を集め、新宗教と呼ばれるようになった。それはベトナムにとっては目新しい現象であったが、第二次世界大戦直後の日本をはじめ、世界的には一般的に見られたことであった。ベトナムの新宗教の概略を研究し、そしてそれを日本の同様な現象と比較したところ、個々の国によって新宗教の誕生時期や発展時期が異なるのはもちろんのこと、異なる社会事情で誕生したにもかかわらず、面白い共通点のあることがわかった。本論においては、日本とベトナムの新宗教を、主に概略・出現理由・特徴およびその社会的影響などの側面から分析し、比較する。

1. 新宗教の概略について

日本では、第二次世界大戦後、特に1950年代以降に新宗教のブームが巻き起こった。それは、政府によって認められている神道・仏教・キリスト教などの宗教団体とは別の信仰・宗教団体であった。実は、そのような信仰・宗教団体はそれ以前の日本にもしばしば見られたが、戦後、新宗教が数多く登場・急発展したのは、特別な理由があった。また、その新しく登場した宗教は以前には見られなかった特別な特徴を持っていた。1945年以前の日本では、20の宗教団体しか認められていなかった。その内訳は、神道が13団体、仏教が5団体、キリスト教が2団体である。しかし、日本で宗教法人法が公布された後、旧宗教団体から分派・独立した新宗教団体および新規登録の宗教団体の数が急上昇し、1949年末には230¹に達した。母体組織から分派・独立した寺と教会の数を合わせると、宗教法人の総数は1546となり、新宗教団体ブームが訪れた。日本の新宗教団体数はそれから十数年間、特に20世紀の50年代から90年代までうなぎのぼりに増え続けた。1995年のオウム真理教

1 Noriyoshi Tamaru and David Reid. *Religion in Japanese Culture: Where Living Traditions Meet a Changing World*. Kodansha International, Tokyo / New York / London, 1996, p. 108.

事件および宗教法人改正法の公布後、日本の新宗教ブームは一段落したようであるが、全体としては様々な新宗教がいまだに存在している。日本の 2011 年の統計資料である『宗教年鑑』によると、政府に認められている宗教法人数は 6705²である。よって、現在では、日本の宗教活動の中で新宗教の占める割合が大きくなったと考えられる。

1985 年代以前のベトナムには新宗教がほとんど存在せず、注目を集めるほどの問題にもならなかった。ニュースで取り上げられるような、社会に悪影響をもたらすいくつかの「邪教」を除いて、このテーマに関する正式な研究はなかったようである。それは、次のようなベトナムの歴史的な現実を反映している。1945 年から 1975 年まで、悲惨な戦争により、ベトナムは南北に分裂していた。1975 年以後、国が統一され平和になったが、その時期の政治・社会的情勢は新宗教の誕生にとって良い環境ではなかった。それに、宗教および信仰は古い社会の未熟な名残であり、成立した新社会においては当然消え去るものであるという考えは、人々の認識のみならず、国家の宗教管理政策においても支配的で、指導的役割を果たしていた。その上、その時期ベトナムはアメリカによって禁輸されていたため、海外からの思想的・文化的影響をあまり受けなかった。1986 年以後、ベトナムは「ドイモイ政策」

(刷新政策)を進め、市場メカニズムや対外開放政策を導入したが、それは経済面・政治面のみならず、文化生活・宗教活動にも大きな変化をもたらした。1990 年代は、仏教やシャーマニズム聖母道 (Đạo Mẫu)、カトリックやプロテスタントなどの伝統的な宗教の復興期となった。ベトナム全国の寺・神社・教会は改修され、新築された。信者の信仰活動には秩序があり、以前の各時期より活発になった。そのような背景の下、新宗教が発展し始めた。複数の学者によれば、その時現れた新宗教の一部がブームを巻き起こしたという。ところが、ベトナムの新宗教は、数と規模において日本のようなものにはならなかった。2001 年 5 月に宗教研究院において行われた新宗教に関する会議での報告結果によると、その時点でベトナムには 50 の新宗教団があり、その中には大本教や創価学会など、日本の新興宗教もあった。2013 年 6 月に社会人文科学大学・ホーチミン校が開催した国際セミナー「現代主義およびベトナムと世界の新宗教」で発表された報告によると、現在ベトナムには 70 から 80 の新宗教団体があり、さらに大きく発展する見込みとのことである。ここでベトナムの新宗教の存在がだんだん明らかになってくる。

2 『宗教年鑑』平成 23 年版、文化庁編、13 頁。

3 Đỗ Quang Hưng. Hiện tượng tôn giáo mới – mấy vấn đề lý luận và thực tiễn, Tạp chí Nghiên cứu Tôn giáo số 5-2011, tr.11.

4 <http://www.thanhnien.com.vn/chinh-tri-xa-hoi/viet-nam-dang-hien-dien-khoang-70-80-hien-tuong-ton-giao-moi-473457.html> (2014 年 12 月 23 日アクセス)。

2. 新宗教登場の理由について

戦後日本の新興宗教ブームに関して、多くの研究者はそのブームの直接的な要因が宗教政策の変更にあることに同意している。信教の自由の原則が明治憲法に定められたが、実際には国家による宗教への干渉がまだ存在していた。よって、日本政府がアメリカを真似て、信教の自由を守る政策を実施した後から、新宗教団体が数多く登場した。当時の日本の社会には、戦前から存在したが法律上認められていない教団が数多く存在した。現在のベトナムにも、いまだ法律上認められていない教団が数多くある。日本政府が1946年に宗教法人令を、1951年に宗教法人法を公布した後、上記のような教団から分派し新興宗教組織として活動登録を行った教団もあった。

日本と異なり、ベトナムの新宗教ブームは政府の宗教政策から直接影響を受けなかった。宗教・信仰令が公布される前には、宗教に関する詳細な法律規定がなく、ベトナムの宗教政策は共産党・国会・政府の議決書・指導書・通達などを通じてのみ実施されていた。ベトナムの国会が、全国の宗教・信仰活動に関する重要な法律基盤を作るため、2004年6月に宗教・信仰令を公布した。実は、ある研究によると、ベトナムの新宗教は1990年前後から見られた、ということである。ただし、これまでのところ、全35の宗教団体のうち、14が正式に国家によって確認されたが、その中には1945年以降に発足したものは一つもなかった。これはベトナムの新宗教をはじめ、一般的な宗教の複雑性を反映している。この20年間で現れた新興宗教団体には、政治的な目的やベトナムの各民族を分断することを目的とする教団が少ない。それにしても、政府に正式に認められていない宗教団体が盛んであることはベトナムの客観的事実なので、国家の宗教管理政策が緩和されると、新宗教ブームが起こる可能性がある。

経済と社会の急変動による信仰の危機は新宗教が生まれた要因の一つだと考えられる。それはベトナムと日本に共通する点であるが、両国の新宗教誕生の要因を詳しく分析してみると、相違点もあることがわかる。

日本では前世紀の50年代から、顕著な経済成長が社会生活に大きな変化をもたらした。まずは、都市化が急速に進み、大勢の住民が田舎から都市へ移住した。1960年までの都市部と田舎の人口比率は7:3である。ベトナムの都市化は日本より遅れ、前世紀の90年代から始まり、この20年間で急速に進んでいる。1990年の都市の総数は500であったが、2000年には649に、現在では753に達した。より良い生活を求めて田舎から都市へ移住した数多くの住民は、以前の日常に根づいた信仰生活から離れるようになり、信仰の危機に陥っている。それは新宗教の誕生にとっては良い土壌となるだろう。日本と比べると、ベトナムにはそのような兆候はあまり見られない。なぜならベトナムの都市化率はまだ低く、2009年で30%、

2015 年でも 38% に達するかどうかの見込みしかないからである。都市化が進み、都市の人口が急速に上昇する。しかもその大部分が若者である。地元の文化的精神生活や伝統的な宗教生活から離れて、多くの都市住民が信仰の危機に陥った。それが原因で、彼らは新宗教の信仰に惹きつけられるようになった。このような現象はこの半世紀の日本にはよく見られたが、ベトナムではあまり見られなかった。しかし、それは都市化と新宗教との発展に伴って顕著になると考えられる。

住民の信仰の危機を和らげるために新宗教が生まれたという観点から、新宗教登場の理由を分析すると、ベトナムの特徴が見えてくる。それは、社会および認識における大きな変化がもたらした世界観の変化である。依然として、宗教が古い社会の未熟な名残であり、成立した新社会においては当然消え去るものという考えは、支配的であった。しかし、ベトナムが経済の刷新政策および国際加盟を果たしてからは、その考えは弱まった。また、長期にわたる悲惨な戦争を経験し、国の独立のために数百万人が犠牲になった国であるため、現在のベトナム住民には精神的トラウマがまだよく見られる。そのような背景の下、あの世の人と接したり交信できる力、特に戦争で死亡した兵士の遺骨を探し出せる力を有する人がだんだんと現れた。彼らは大勢の人を宗教生活に勧誘しており、全国で、特に農村部では宗教活動が一段と盛んになっている。それも新宗教の成長にとって良い土壤だと思われる。

3. 著しい特徴

日本とベトナムの新宗教には次のような共通点がある。まずは、伝統的な宗教より柔軟な布教方法をとっている。次に、両国の新宗教の教祖は、神の宣託を受けて国民を救済することを自ら主張している。布教活動は口コミであったり、講話の形をとっている。日本にはマスコミを使って信仰を広める教団があるが、ベトナムではビデオ・CD・DVD・インターネット、または衛星回線を通じて信仰を広めるのが最も普及している⁵。しかし、ベトナムと違い、日本の新興宗教団体は法人という形をとっている⁵ので、活動登録をすれば、信者の数が一気に増加する。例として真如苑の正式な信者数について見てみると、1965 年は約 12 万 5000 人であったが、1975 年には 30 万人、1985 年には 259 万 6000 人に増加している（2004 年には信者数が 80 万 6753 人に減少した）。

ベトナムの新興宗教団体はより小規模であり、信者数はおおよそ数百人で、数千人規模になった教団は少ない。例えば、ゴク・ファット・ホーチミン教団には某信

5 Quang Mịch. Đăng ký và công nhận tổ chức tôn giáo, Sở Nội vụ Thành phố Đà Nẵng. カウンミツ、宗教についての登録と確認、Danang City の内務所 (<http://www.noivu.danang.gov.vn/noivu/index.php/vi/ton-giao/ton-giao/1946-dang-ky-hoat-dong-va-cong-nhan-to-chuc-ton-giao->). Truy cập ngày 20 tháng 12/2013).

者一人しかいない。さらに、ベトナムの新興宗教団体は法人という形をとっていないため、法律上で守られておらず、しばしば社会秩序に悪影響を与えたとして解散させられている。

新宗教は、仏教・道教・キリスト教や土着の宗教（日本は神道で、ベトナムはシャーマニズム聖母道〔Đạo Mẫu〕）などの伝統的な宗教から多くの思想および儀式を借用し、混ぜ合わせたものである。ベトナムには、英雄のイメージを借用したり、ホーチミンを仏の生まれかわりと見なしたりする新宗教もある。そのような新興教団は全国各地から数多くの信者を惹きつけた。それは、戦争から自らを解放したいという考えが国民の信仰に大きな影響を与えているという、ベトナム社会の特徴を反映している。しかし、社会状況を直接的に（タン・ハイ・ヴォー・ツォン・ス教）、あるいは間接的に（ロン・ホア・デー・ラク教）批判することで、現行の社会秩序に反対する新興宗教団体も少なくない。

新宗教の共通点は、現実性があること、または人々の実生活の中での関心や利益を満たそうとする傾向があることである。ほとんどの新宗教は、病気の治療については現代的な治療方法を否定して魔法的治療を薦め、経済的利益をもたらすことを約束する。例を挙げると、ゴク・ファット・ホーチミン教はホアン・ティエン・ロンの神輿を作り、その神輿の祭壇に供えられた水を飲み、お祈りをすれば、癌をはじめとするすべての病気が治ると主張している。中部高原にあるハ・モン教は、少数民族の人々に対し、ハ・モン教に入信すれば、病気が治り、労働しなくても贅沢な生活が送れるようになるなど、論している。

ベトナムの多くの新宗教の特殊な点は、政治的な目的を持ち正当な思想体系から逸脱しようとする傾向があることである。多くの場合、現行の体制に反対し、各民族間の団結を壊すという政治的な目的として、信仰を利用している。例として、中部高原で誕生したデガ・プロテスタントという団体を挙げてみよう。彼らはデガ国家を樹立しようとして、民衆を煽りベトナムの各民族間の団結を破壊しようとした。同様に、民族のためのキリスト教と自称するハ・モン教の後ろには、フルロ（中部高原に暮らす少数民族のために、独立した政府を創設することを目的とする少数民族の組織）があり、ヴァン・チュ教の裏の目的も、北部にあるモン族をベトナムの各民族から離脱させることにある。

4. 新宗教の社会的影響について

新宗教の社会的影響は複雑な問題である。ベトナムの新宗教の持つ裏の面はよく注目される。実は日本とベトナムにも、宗教という肩書きを利用して他の目的のために活動する組織や社会団体が結構な数で存在し、社会・政治・治安に対し悪影響を及ぼす例も少なくなかった。オウム真理教が1995年に東京都内の地下鉄構内で猛毒のサリンを散布した殺人事件は、日本の代表的な例である。そのほかにも、宗

教活動を利用して詐欺を働いたり、不正な利益を得たり、脱税等の違法行為をした例がある。ベトナムの事情はさらに複雑である。「信仰を売買する」目的で詐欺行為に及ぶなど、利益を得ることを目的とする新宗教のほか、社会秩序を混乱させることを目的とする新宗教もある。例としてはディエンビエン省のヴァン・チュ教が挙げられ、彼らは政治的な目的のために、多数のモン民族の信者を惹きつけた。ダクラク省のハ・モン教が少数民族の住民に対して、世界滅亡の日が近づいているので、死後、天国へ行けるように、教会に行くことや農生産をすることをやめて、畑に行きお祈りをするように煽った事件や、21世紀初頭に中部高原で発生したデガ・プロテスタント教事件などがあった。それを機に、ベトナムが現在抱える新宗教の複雑性が見えてきたのである。

それにしても、日本の新宗教の研究を通じて、以下のことが理解できる。それは、新興宗教団体が現実の社会の中で一部の国民の主観的な宗教ニーズに対応していること（宗教の悪用を除いて）、新宗教は団体活動を通じて過当競争による現代人のストレスをある程度解消させるのに役だっていること、多くの学者の言うように新宗教は不運な人々に人生の糧を取り戻させるのにも役立つこと、などである。

21世紀。日本の新宗教ブームは一段落したようであるが、ベトナムの新宗教は盛んになり始めた。新宗教自体はそもそも色々な側面を持つ複雑な現象であるが、ベトナムの場合は政治的な要素・思想の影響を受けたため、より複雑になった。1945年から現在まで、日本とベトナムでは新宗教の誕生時期および誕生背景は異なるが、新宗教の生まれた理由やその特徴、特に社会的影響には顕著な共通点が多く見られる。日本の新宗教と比較して、ベトナムの新宗教ブームを研究し続けることは、価値ある経験をもたらすであろうと思っている。

参考文献・資料

- ドー・クアン・フン「新宗教現象・論理および現実」『宗教研究雑誌』第5巻、2001年
 ドー・クアン・フン「信仰と新宗教現象との関係」政府の宗教委員会
<http://btgcp.gov.vn/Plus.aspx/vi/News/38/0/240/0/1766/>（2014年12月24日アクセス）
 ティウ・クアン・タン「新宗教に関する報告」2001年に宗教研究院に行われた新宗教現象に関する科学セミナー
 ファム・ホン・タイ『日本の現在の宗教生活』ハノイの社会科学出版社、2005年
 Inoue Nobutaka (General Editor). *Contemporary Paper on Japanese Religion*, Institute for Japanese Culture and Classics, Kokugakuin University. <http://www2.kokugakuin.ac.jp/ijcc/wp/cpjr/newreligions/index.html>（2014年12月24日アクセス）
 Noriyoshi Tamaru and David Reid. *Religion in Japanese Culture: Where Living Traditions Meet a Changing World*. Kodansha International, Tokyo / New York / London, 1996
 島蘭進『現代宗教の可能性——オウム真理教と暴力』岩波書店、2002年

島田裕巳『新宗教ビジネス』講談社、2008 年

島田裕巳『日本の 10 大新宗教』幻冬舎新書 061、2007 年第 1 刷発行、2008 年第 9 刷発行